カザンラック市の第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」について

Ⅰ．はじめに

1．原爆展の開催構想はマーリン副大統領の来広から

ひろしま・ブルガリア協会は、2006年8月1日から1か月間に渡り、東欧の国・ブルガリア共和国のカザンラック市で第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催してまいりました。

思い起こせば、同原爆展の開催を思い立ったのは、2005年5月14日にアルゲン・マーリン副大統領が来広した際に当協会設立準備委員会の事務局長として協力し、広島平和記念資料館の見学、慰霊碑への献花、秋葉忠利広島市長の表敬訪問などを企画・展開したことからです。

マーリン副大統領とともに秋葉広島市長を表敬訪問
（2005年5月14日）

中でも秋葉市長との会見の中での次のような同副大統領の発言に大きなショックを受けました。

マーリン副大統領と

同副大統領は同国がソ連圏最優等国であった時、「広島原爆の30～40倍の威力を持つ核兵器を搭載したミサイル約150発の発射責任者として、『発射準備』の指令を受けてミサイル発射ボタンの前に立ったことがある。その際に頭に浮かんだのはブルガリアの多くの子どもたちの顔だった。ボタンを押せば第3次世界大戦が勃発し地球上に甚大な被害を及ぼすのにと逡巡しました。その時、幸いにもボタンを押さなくて済みました」と。そして「核兵器は人類の敵。1日でも早く廃絶を」と語ったのです。

次いで、7月8日には当協会設立総会では東京から駐日ブルガリア共和国大使館のブラゴヴェスト・センドフ特命全権大使が、8月5、6両日の被爆60周年・平和市長会議と平和記念式典にはカザンラック市のダミャノフ市長がそれぞれ来広した際に、両氏に原爆展開催に向けての具体的な話をすることができました。

センドフ特命全権大使と

今回の原爆展の開催は、①ブルガリアの要人（マーリン副大統領、センドフ大使、ダミャノフ市長、ばらの女王ら）の来広の際に「扉」を開き②第1次・ブルガリア訪問団が確かな「道」を創り③第2次・ブルガリア訪問団が「実施・完結」する、という1年余りの情熱と執念と継続とチームプレーの賜物だと思っています。勿論、広島市、広島平和記念資料館、外務省、在ブルガリア日本国大使館、JICAブルガリア事務所、旅行社など多くの関係者のご協力とご支援があったからこそは言うまでもありません。

今回の原爆展は、カザンラック市と当協会の「共催」、カザンラック・アートギャラリーと広島平和記念資料館の「協力」、在ブルガリア日本国大使館の「後援」という形で開かれました。 当協会にとっても貴重な活動と歴史の足跡を残すことができました。そこで、原爆展開催までの経緯を含めて報告書としてまとめてみました。

ダミャノフ市長と

原爆展開催のために多大なご協力、ご支援をいただいた国内外の多くの関係者の方々に厚くお礼申し上げます。なお、カザンラック市の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」（11頁～42頁）のところは、役職を当時のままにしてあります。

2007年（平成19年）5月 吉日

「ブルガリア訪問団」　第1次・団長代行、第2次・団長

ひろしま・ブルガリア協会・会長　今村　功

2. カザンラック市で、毎年8月の原爆展と他の月に巡回展の開催などを確認

ひろしま・ブルガリア協会
代表理事
寺田 満和 アレルギー呼吸器内科、医師
第1次・ブルガリア訪問団　団長

ダミャノフ市長から原爆展の開催を確認
（2006年5月3日）

第1次・「ブルガリア訪問団」（財団法人・広島平和文化センター協賛）は2006年6月3日（土）、カザンラック市にダミャノフ市長を表敬訪問し、藤田雄山・広島県知事や秋葉忠利・広島市長、児玉更太郎・安芸高田市長らの親書、さらに広島市長からの原爆ドームのタペストリーと当訪問団からの宮島彫りを手渡すとともに、訪問の第1目的である「ヒロシマ・ナガサキ原爆展の開催」について率直な意見を交換しました。

同市長と通訳のマリアさんとは2005年8月5日に広島で会って以来の再会で、とても懐かしく会話をしました。訪問団長代行の今村功・現会長が①今年8月の第1回・原爆展の開催②毎年の原爆展の開催③同市周辺都市での巡回原爆展の開催・・・を要請しました。これに対して同市長は、全ての実施を確約するとともに、すでに広島平和記念資料館から原爆展用の写真ポスター2組などの現物が在ブルガリア日本国大使館を通して届いていることを説明されました。原爆展開催の確約を得たことで、第1次・訪問団の大きな1つの役割を果たすことができ、後は第2次・訪問団に原爆展のオープニングに参加していただくだけだ、とホッとしたものです。この懇談の席には、在ブルガリア日本国大使館の福井宏一郎特命全権大使や当協会相談役の浅野洋二氏（広島県議会議員）、JICAブルガリア事務所の香川敬三所長らも駆けつけていただき、より充実した懇談の場になりましたことに対し、感謝しております。

ともかくも第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」が成功裏に終了したことに対し、ご協力、ご支援いただいた多くの関係者の方々に心より感謝申し上げます。

Ⅱ. 駐日ブルガリア共和国大使館　特命全権大使からのコメント

原爆展は核兵器の拡散防止と世界の平和と理解のメッセージ

駐日ブルガリア共和国大使館
特命全権大使
ブラゴヴェスト・センドフ 氏
ひろしま・ブルガリア協会 名誉顧問

センドフ大使と秋葉市長を表敬訪問
（2005年7月8日）

設立からわずか1年、ひろしま・ブルガリア協会は2006年6月と8月に我が国への2つの重要な訪問を実現させ、文化、教育、ビジネスの分野における地域レベルでの二国間交流および人的交流の奨励の活発化に取り組む意思を示しました。

第1次訪問の際に行われた、スヴェトラ・トシコヴァ・ブルガリア共和国官房長、ステファン・ダミャノフ・カザンラク市長、福井宏一郎・在ブルガリア日本大使閣下、ソフィア第18高校・「ウイリアム・グラッドストン」、ヴェリコ・タルノヴォ大学・「聖キリルとメトディ」の両校の日本語学科の教師や学生などへの表敬訪問の成功は、協会とわが国との間の有益な協力関係の基盤づくりへの貢献となることに違いありません。

2006年8月に、ひろしま・ブルガリア協会とカザンラク市役所が共同で主催したカザンラク・アートギャラリーでの「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」の開催も重要な意味を持ちます。原爆写真展は、ブルガリアと日本の文化交流における2006年の重要なイベントとしてだけでなく、核兵器の拡散防止および世界の平和と理解のメッセージを呼びかけるという大変幅広い役割を果たしています。

駐日ブルガリア共和国大使館大使、そして、ひろしま・ブルガリア協会名誉顧問として、設立1年目に協会によって実現されたイニシアチブへの高い評価を表したいと思います。

互いに関心のある分野における地域レベルの二国間交流の奨励と両国間の友好関係の強化のために、協会の理事会をはじめ会員の方々の活動が今後とも続くことを期待しています。

Ⅲ. 原爆展の主催者あいさつ

1. 訪問団の撒いた種を世界平和の大きな花に育てたい

ひろしま・ブルガリア協会
訪問団派遣当時の会長
海生　直人 広島修道大学教授

ダミャノフ市長の歓迎の夕べで
（2005年8月5日）

暖かな日が続いている中、街も山も徐々に新緑と初夏への装いへと変わりつつあります。会員の皆様方には益々ご清祥のことと心よりお慶び申し上げますと共に、協会の活動に対してのご理解・ご支援に深謝申し上げます。

2006年は、今村功・現会長はじめ、会員皆さまのご尽力により、第一次・第二次・訪問団が多大なる成果をお土産に無事帰国したこと、何より喜ばしく存じます。

第一次・訪問団では、バラ祭りに参加するのみならず、今後の活動の布石となるべく、大統領府、カザンラック市など各所で協会の存在を周知させ、その絆を深めて下さり、また第二次・訪問団では、被爆写真展開会式列席、被爆証言の提供という、ヒロシマならではの交流を成し遂げ、さらに前訪問団が培った友好・信頼関係をさらに固めて下ったことは協会にとって非常に意義深いものであったと確信いたします。

こうして、訪問団の皆さまが撒いてきて下さった種の一つ一つを、これから会員皆で地道に育てていこうではありませんか。それが世界平和という大きな花を咲かせることに繋がることを願ってやみません。

末筆になりましたが、この度のブルガリア訪問に際して多大なるご協力を賜りました広島市の秋葉忠利市長をはじめとする担当職員、広島平和記念資料館の前田耕一郎館長はじめ財団法人・広島平和文化センターの担当者、外務省中・東欧課ブルガリア・マケドニア担当の荻野毅外務事務官、在ブルガリア日本国大使館の福井宏一郎特命全権大使、横山佳孝参事官、臼田頼仁医務官、山岸あおい三等書記官、さらにJICAブルガリア事務所の香川敬三所長ほか職員の皆様に心より御礼を申し上げます。

2. 核兵器は全人類の敵。原爆展は核の脅威を無くすために貢献

カザンラック市
市　長
ステファン・ダミャノフ 氏

広島平和記念式典
（広島市平和公園で）

被爆60周年の2005年8月6日の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に参列し、核兵器の廃絶と恒久平和へ向けての行動の重要性を強く認識しました。

これを機に、さらに核兵器は全人類の敵だということを強く感じ、（ひろしま・ブルガリア協会役員との懇談の中でカザンラック市での原爆展開催の提案を受けて）、2006年8月に当市で原爆展を開催したい、との思いに至りました。

今日まで数十年にもわたり、世界は、核の脅威にさらされており、この事実が未来への展望を曇らせてきました。原子爆弾により引き起こされた苦しみの影は、人類の重荷であり、人類滅亡の脅威であり続けています。

世界の人々は、長年にわたり、この脅威を取り除くことを強く望んできました。世界の人々の願いに応え、核兵器を2020年までに廃絶し、世界平和を構築しようとする平和市長会議の取り組みは、地球を守り、人類の歴史を継続させる責任を個々人に感じさせるものです。

カザンラックが、原爆ポスターの悲しい展示を市民や訪問者に紹介する機会を得たこと、また、この展示会により、核の脅威を無くすため、世界中の人々の意識を高め、国際的取り組みが行われるよう、多少なりとも貢献できることを嬉しく思います。

世界平和を構築するという平和市長会議の究極の目的を達成することは、幻想ではなくなり、現実のものとなっていくことを、我々は手を携えて、人々に表明します。

「ひろしまブルガリア協会」、広島平和記念資料館に多大なご協力をいただきましたことに感謝申し上げ、ご挨拶と代えさせていただきます。

（2006年8月1日　原爆展オープニング時の挨拶）

Ⅳ. 原爆展の後援・在ブルガリア日本国大使館からのコメント

ブルガリアで広島原爆展が開催され、平和の重要性を共に確認

在ブルガリア日本国大使館
特命全権大使
福 井 宏 一 郎 氏

ダミャノフ市長と福井大使と第1次・訪問団メンバー
（ 2006 年 5 月 3 日 ）

2006年8月、広島市、ひろしま・ブルガリア協会、広島平和記念資料館（原爆資料館）そしてカザンラク市など、多くの関係者の皆様の尽力を得て、カザンラク市においてヒロシマ・ナガサキ原爆展が開催されました。

日本は、広島・長崎の悲劇が二度と繰り返されないよう、戦後一貫して平和国家としての道を歩み続けて来ました。そしてその平和国家として、世界で唯一の被爆国としての日本の重要な使命の一つが、核の脅威そしてその被害の悲惨さを世界に伝え続けることです。

日本とブルガリアは、共に、平和な国際社会の構築のために協力する重要なパートナーです。今回、様々な関係機関のイニシアチブによって、ここブルガリアでヒロシマ・ナガサキ原爆展が開催され、平和の重要性を共に確認することが出来たことは、二国間の絆を深める大変意義深いことでした。関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

これからの広島市の繁栄と、ひろしま・ブルガリア協会の益々の活発な交流活動を祈念致しております。

Ⅴ. 原爆展の協力・資料提供者からのあいさつ

世界各地での原爆展開催で核兵器の拡散防止を

広島平和記念資料館（原爆資料館）
館 長
前 田 耕 一 郎 氏

カザンラック市からの「ばらの女王」らを資料館に案内
（２００６年５月２日）

ブルガリア、カザンラック市での原爆展開催を本当にありがたく思います。
核兵器の拡散を押しとどめ、世界中から核兵器を無くしていくためには心ある市民の力がぜひとも必要です。

今回、ブルガリアとの市民レベルの交流の中でバラの谷の街カザンラックにおいて原爆展が開催され、彼の地の人々に被爆の惨状を紹介して頂きました。被爆者本人の話によって、「誰にも自分たちと同じ経験をさせたくない」との強い願いが伝わり、核兵器は決して使われてはならず、地球上から無くさなければならないとの認識が共有されたことと思います。

私どもも尽力してまいりますので、このような動きがさらに広がっていくようご協力をお願いします。

広 島 平 和 記 念 資 料 館（ 原 爆 資 料 館 ）

Ⅵ. 協会・顧問からのコメント

1. 反核の息吹がブルガリアで大きく育ち周辺諸国へ広がることを

ひろしま・ブルガリア協会

顧　問

岸田 文雄 衆議院議員

原爆ドーム

このたびは、第1次・第2次・ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ訪問をそれぞれ成功裡に終えられ、ここに報告書を刊行されますことを心からお祝い申し上げます。

貴協会発足後わずか1年半しか経過していない中で、2度にわたりﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ訪問団を派遣され、実り多き成果をもって無事帰国されましたことは、各訪問団の団長である寺田満和・現代表理事と今村功・現会長をはじめとした協会の皆様の団結力と熱意の顕われであり、敬意と感謝の意を表する次第です。

さて、ブルガリアは、歴史的に我が国と良好な関係を保っており、欧州における中東との玄関口にあたるという地理的重要性からも、今後我が国がより一層の経済・文化交流の推進を目指すべき国の一つと言えます。 このような背景の中で、お互いの国への理解や尊敬を市民交流によって築いておられる皆様の草の根活動は、両国間の将来にとって欠かせない取り組みだと考えています。

また、ヒロシマ・ナガサキ原爆展では、核兵器による悲惨な惨状や被爆体験を公開され、核兵器廃絶と世界平和をブルガリア国民に訴えられました。原爆展に来場した多くの方々が、わずか2ヵ月後、北朝鮮の核実験実施の報に接し、原爆展での悲惨な展示が脳裏を過ぎり、展示された内容が現実に起こり得る危機であることを強く認識したことでしょう。

皆様が蒔いた反核の息吹が、ブルガリアで大きく育ち、周辺諸国へ広がっていくものと確信しています。

終りになりますが、本書を通じて皆様の素晴らしい活動が多くの日本人に認知され貴協会がますますご発展されますことと両国の末永い友好関係を祈念いたしまして、お祝いの御挨拶とさせていただきます。

2.「ヒロシマの心」の共有に向けて果たした役割は大きい

ひろしま・ブルガリア協会

顧　問

斉藤　鉄夫 衆議院議員

慰霊碑

広島にかかわりを持つ一人の人間として、まず、ブルガリア共和国のカザンラック市での第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」の開催を実現された関係者の皆さまのご尽力に対し、心から感謝とお礼を申し上げます。

ブルガリアは、過去に500年間という長い間、オスマントルコの侵略と圧政に苦しめられた末に、多くの犠牲者を出して独立を勝ち取った国です。それだけに、戦争反対と恒久平和に向けての市民の思いは、一段と強いように思われます。そのブルガリアの中のバラの町といわれるカザンラック市での原爆展は、市民の間に大きな反響を呼んだことでしょう。

広島人の大きな使命の一つに、「世界から核兵器を廃絶し、恒久平和を構築する」という”ヒロシマの心”を訴えるという活動がありますが、まさに今回のカザンラック市での第1回・「原爆展」の開催と同国で初めての「被爆者の証言」活動は、ヒロシマの心の共有に向けて大きな役割を果たしてきた、と確信しております。

私も広島に住む者として、これまで非核三原則の堅持や被爆者の援護対策などについて真剣に取り組み、さらに毎年8・6前の原爆犠牲者のご冥福を祈る原爆慰霊碑の献花、原爆養護ホームの訪問と被爆者との懇談などをして、核兵器廃絶と被爆者援護、恒久平和の実現に微力ながら努力してまいり、今後も生涯に渡って取り組まなければならない大きな課題の一つと捉えて活動していきたい、と決意しております。

また、ひろしま・ブルガリア協会の設立の際には微力ながら協力させていただき、設立後は顧問という立場で、側面的に応援をさせていただいております。

これからも、ひろしま・ブルガリア協会の活動が順調に進むことを期待するとともに、私でできることは全力でご協力させていただこうと、思っております。最後に、協会の皆さま方のご健勝と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

広島平和記念資料館と平和公園と120万都市に発展した市街地

Ⅶ. 協会・相談役からのコメント

2005年8月6日の約束を果たしてくれたダミャノフ市長に感謝

ひろしま・ブルガリア協会
相談役
浅野 洋二　広島県議会議員

アーノルド・トインビー展で
（2005年8月6日）

ブルガリア共和国カザンラック市での第1回・「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」の開催と成功まことにおめでとうございます。わずか1年で開催までこぎつけた、ひろしま・ブルガリア協会の今村功・現会長をはじめ、関係者の方々のご苦労とご努力に対し、心から敬意と感謝の意を表します。

カザンラック市のステファン・ダミャノフ市長とは2005年8月上旬に、福山市で再会し、引き続いて広島市の平和市長会議に参加された8月5日の夜、ひろしま・ブルガリア協会のダミャノフ市長歓迎交流会で歓談。翌8月6日の平和記念式典に参列された際、軽い日射病になられた同市長に市内で休憩を取っていただいた後、今村・現会長とともに「カザンラック市で原爆写真展を開いていただきたい」と提案したところから、同市での原爆展が具体的にスタートしたのです。

これに対し、ダミャノフ市長が「それはグット・アイデアだ。是非、カザンラック市で原爆展を開きたい。私は、これから帰国するので貴協会が広島市などの関係機関との橋渡しをして下さい」と即答されたのが昨日のように思い出されます。同市長は①原爆写真展のオープニングの際には秋葉広島市長や貴協会の代表団が参加して欲しい②カザンラックで平和市長会議の開催③広島市民との友好交流の促進―などを希望して帰国されました。

それ以来、原爆写真展を開催するための具体的方策として、日本語が通じないカザンラック市の担当者との連携や広島平和記念資料館へ資料の貸し出し依頼、展示品の現地までの運搬、同市での展示の準備、通訳・翻訳など、様々な課題が残され、「無事に開催までこぎつける事ができるのか」と心配をしておりました。

藤田県知事を表敬訪問
（2006年5月2日）

しかし、当協会の事務局の献身的で粘り強い働きかけで、広島市、広島平和記念資料館、外務省、在ブルガリア日本大使館、JICAブルガリア事務所、カザンラック市、カザンラック・アートギャラリーなど広範な関係者が快く協力して下さり、ここに原爆写真展が開催・成功の運びになったものです。これら多くの関係者に、ひろしま・ブルガリア協会に代わって心からお礼を申し上げます。

2005年8月6日のダミャノフ市長とのお約束が、約1年後の2006年8月1日に実現したことに感慨無量です。広島から遠く離れた東欧の国・ブルガリアのカザンラック市で、核兵器廃絶と世界の恒久平和を希求する「ヒロシマ・ナガサキの心」が永遠に燃え続けることを期待してやみません。

Ⅷ. 外務省の担当事務官からのコメント

「平和」が広島とブルガリアとの交流の重要なテーマ

外務省欧州局中・東欧課
外務事務官
荻野　毅　氏

センドフ大使と当協会役員
（2006年2月4日）

2005年5月、愛・地球博におけるブルガリア・ナショナルデーに際し、日本政府の招待によりマーリン副大統領が来日されました。副大統領一行は愛知訪問後、広島を訪問されましたが、同行していた私は、ひろしま・ブルガリア協会の設立を準備されていた今村様とお会いすることができました。

その際、「平和」が広島とブルガリアとの交流の重要なテーマになるとの点で意見が一致しましたが、本年8月のカザンラクにおける原爆展の開催は、まさにこのテーマに沿ったものでした。

本年、ひろしま・ブルガリア協会は、原爆展の開催にあわせた訪問団の派遣を含め、2次にわたり訪問団を派遣され、現地での交流を深められました。

また、ブルガリアからバラの女王と日本語弁論大会優勝者が来日した際の受け入れや広島大学に対するブルガリアへの日本語教師派遣の働きかけなどを通じ二国間の交流促進に重要な役割を果たされました。

外務省において日本・ブルガリア関係に携わるものとして、この機会に、ひろしま・ブルガリア協会の皆さまに感謝申し上げるとともに、益々のご活躍とご発展をお祈り申し上げます.

Ⅸ.（財）ひろしま国際センターからのコメント

平和を基調とした国づくりに原爆写真展は大切な役割を果たす

（財）ひろしま国際センター
事務局長・交流部長
佐々木 正善 氏

2006年度総会で挨拶する佐々木事務局長
（2006 年 4 月 8 日）

ひろしま・ブルガリア協会の第二回のブルガリア訪問も成功裏に終わり、着実に広島とブルガリアとの絆が深まっているのを感じます。特に今回は「ヒロシマ・ナガサキ原爆写真展」が実現し、この写真展は地元の多くのメディアの関心を呼び、800人を超える市民が写真展を訪れたと聞いています。

原爆写真展はブルガリアにとって、平和を基調としたこれからの国づくりに、きっと大切な役割を果たしてくれるはずです。

協会発足前（協会設立準備委員会の時）を知る私としては二年目にして、よくここまで実りのある事業を展開されている、と協会の皆様方のエネルギーに敬服しています。

ブルガリアの豊かな自然、伝統ある歴史そして穏やかな人々との交流の積み重ねはきっと、大きな実を結ぶものと思います。

農業国ブルガリアは、今、経済発展という当面の大きな目標があります。今後EUに加盟し経済面でも飛躍が期待されるブルガリアを考えると、地元広島のブルガリアファンの経済関係者の方々も、多く、この協会に参加され、より幅広い交流、活動が展開されることを期待したいと思います。

Ⅹ. 原爆展開催までの協力・担当者からのコメント

1. 日本の平和への願いをブルガリアの人たちに伝えた

在ブルガリア日本国大使館
文化広報担当・書記官
山岸 あおい 様

駐ブルガリア日本国大使館

2006年の夏、バラの町として有名なカザンラクに於いて、ひろしま・ブルガリア協会、広島平和記念資料館、そして広島市をはじめとする、多くの方々のご尽力により、ヒロシマ・ナガサキ原爆展が開催されました。

約一か月に渡って開催されたこの原爆展を通じて、日本の平和への願いを、ここブルガリアの方々にお伝えすることができ、この展示会の準備に当たられた関係者の皆様に対する感謝の気持ちで一杯です。

ヒロシマ・ナガサキ原爆展のオープニング当日には、ひろしま・ブルガリア協会の今村功・現会長が率いられる第二次・ブルガリア訪問団がカザンラクに到着され、今村・現会長が秋葉忠利広島市長のご挨拶を読み上げられた他、被爆体験者の佐々木愛子さん、そして、ひろしま・ブルガリア協会会長代理（当時）として海生郁子さんがご挨拶して下さいました。

しんと静まりかえった会場の中で、佐々木さんの平和を訴える声を、そこにいた人々がしっかりと受け止めていた様子がとても印象的でした。またセレモニー終了後は、来場者の一人ひとりが、大きなため息を漏らしたり、「なんてことだ」と言ったように頭を左右に振りながら、原爆の被害の悲惨さを表すポスターを一つ一つ食い入るように眺めていた姿が、強く印象に残っています。

メールのやり取りに応えてくれた山岸書記官とソフィアのホテルで最終打合せ

会場では私自身も、今日ここを訪れた人々が皆平和への想いを一層強くして帰って欲しいと願いながら、千羽鶴の由来や鶴の折り方を、訪れた市民や子供たちに紹介させて頂きましたが、どなたもとても熱心に説明に聞き入り、鶴の折り方を覚えて行かれました。

こうした市民との直接の交流を含む今回の原爆展の開催により、核の恐ろしさそして平和の尊さがより多くの人々に理解され、この原爆展が平和な国際社会の構築の一助となったことを確信しています。関係者の皆様、本当に有り難うございました。

＊山岸書記官とはメール交換、約200回。お世話になりました。

2. ひろしま・ブルガリア協会とカザンラック市の熱意と努力に感銘

広島平和記念資料館（原爆資料館）
啓発担当
沖田 なつき 様

資料館と子どもを抱く母

2006年8月、ブルガリア・カザンラック市において「ヒロシマ・ナガサキ被爆写真展」が開催され、成功を収められましたことを心よりお慶び申し上げます。

私は、広島平和記念資料館で海外への原爆展資料貸出を担当しております。

カザンラックでの被爆写真展の開催計画をお伺いしたのは、2005年の秋でした。それ以来、何度も今村功・現会長にお越しいただき、展示資料やその郵送方法について検討を重ねました。

カザンラック市側の担当者ともEメールでやりとりしましたが、並々ならぬ熱意が感じられ、この写真展が充実したものになることを確信しました。

ただ一つ、現地の郵便事情が分からないため、資料の郵送方法については悩みましたが、結局、在ブルガリア日本国大使館にもご協力いただき、無事に会場に資料をお届けすることができました。

今回の写真展を通じて、日本から遠く離れたカザンラック市民の方々に原爆被害の実相について理解を深めていただけたことは誠に意義深く、これもひとえに「ひろしま・ブルガリア協会」の皆様のご尽力、そしてカザンラック市の皆様のご協力の賜物です。この場を借りて、関係者の皆様にお礼を申し上げます。

今後も、当館の活動にご理解・ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

＊沖田さんには、カザンラック市との間での具体的な連絡を、何度も英訳していただいて送っていただきました。また、原爆展の資料送付については、「外務省ルートであれば安全で確実」とのアドバイスを受けて、同省との連絡と資料送付をしていただきました。本当にありがとうございました。

ＸＩ．原爆展の開催と平和市長会議の加盟都市の状況

1. 資料の提供国・地域と原爆開催数は1978年～2007年度までに251国・地域で1,382か所

広島平和記念資料館では、1978（昭和53）年から、国内とイギリス宛に「原爆写真パネル」（20枚組）の提供事業を開始した。1982（同57）年から、写真パネルをポスター化して提供するようにし、1978年～1998（平成10）年度末までの提供は計854件にのぼる。

1999年（同11）年度からポスター内容を全面改訂し30枚組に増やす。以来、2005（同17）年度までに延べ251国・地域に計528件提供した。

1978年度からの総計数は実に1、382件に及んでいる。

2. 平和市長会議に2006年10月末、現在で120か国・地域1,432都市が加盟

1982（S57）年6月24日　ニューヨークで開かれた第2回・国連軍縮特別総会の席上、広島市の荒木武市長（当時）が提唱し、世界の都市に呼びかけ始める。以来、2006年10月31日現在、120か国・地域の1,432都市が平和市長会議に加盟し、それぞれで反核兵器・平和推進の行事を展開している。

ＸⅡ．原爆展への出発を広島市長に報告
原爆展の成功とカザンラック市との交流推進を

山田助役から秋葉市長の親書を預かる

2006年7月25日、カザンラック市の原爆展参加への出発を報告するために、第2次・訪問団一行らは広島市役所に秋葉市長を訪問した。これに対し、同市長が不在のために山田康助役が応対してくれた。

当協会からは第2次・訪問団の今村、海生 、佐々木の3人と渡辺好造理事（広島市会議員）が山田助役と会い、訪問スケジュールや原爆展の日程、さらに第1次・訪問団の報告書を手渡して、それぞれ報告した。訪問団員はそれぞれが原爆展に望む決意と気持ちを伝えた。

山田助役から秋葉市長の親書を預かった訪問団員ら
（ 2006 年 7 月 25 日 ）

これに対して、山田助役は被爆60周年の平和市長会議や平和記念式典に参加したカザンラック市のダミャノフ市長に、初めてのヒロシマ・ナガサキ原爆写真展の成功と、同市の発展、同市長のご活躍、両市の友好交流の推進などを祈っている、とお伝えくださいとの伝言と秋葉市長からの親書を預かった。

ⅩⅢ. ブルガリア共和国

1. ブルガリアの概況

国　　名　ブルガリア共和国(略称・ブルガリア)

位　　置　ギリシャとトルコの北のバルカン半島に位置し、北にルーマニア、西にセルビア・モンテネグロ、マケドニア、東に黒海に囲まれている。日本からの直行便はなく成田からウイーン(フランクフルトなど)経由で約12時間。

総 面 積　約111K㎡(世界102番目、日本の約3分の1)。国土の3分の1が山岳地帯。バルカン半島の最高峰ムサラ山(標高2925m)を有す。

人　　口　約750万人(世界で92位)

首　　都　ソフィア(人口約120万人)

独　　立　宣言　1878年03月03日
　　承認　1908年09月22日

公 用 語　ブルガリア語(キリル文字でロシア文字の原語)

通　　貨　通貨単位　レバ(Lv)＝約70円

貨幣価値　日本の10～8分の1

民族構成　ブルガリア人83．6%、トルコ人9．5%、ロマ(ジプシー)4．6%、その他2．3%

政　　治　共和制。国家元首は大統領(任期5年、国民の直接投票で選らばれ、2期まで再選可能。軍の最高司令官、国家安全諮問会議議長も兼務)

ブルガリア共和国地図

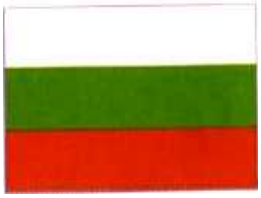
議　　会　1院政。任期4年で定数240人

宗　　教　ブルガリア正教83．8%、イスラム教12．1%、ローマ・カトリック1．7%、ユダヤ教0.1%、その他2．3%

産　　業　酪農業と世界の80%を占めるローズオイルの生産国ヨーグルトも有名。

国　章

国　旗



親 日 派　国立ソフィア大学、同ヴェリコ・タルノヴォ大学、スヴィシュトフ経済大学の3大学と、小学校から高校までの一貫教育校・第18総合学校,ルセ市のヴァシル・レフスキ総合学校の3大学2総合学校で6コースの日本語コースがある。

月　　給　円換算で平均2万5000円(大半が共働き)

世界遺産＜9か所＞(登録年)

文 化 遺 産 ＜7か所＞

①ボヤナ教会(1979年)
②マダラの騎士(　同　)
③カザンラックのトラキア人の墓(　同　)
④イヴァノヴァの岩窟教会群(　同　)
⑤ネセバルの古代遺跡(1983年)
⑥リラの僧院(　同　)
⑦スヴェシュタリのトラキア人の墓(1983年)

自 然 遺 産 ＜2か所＞

①スレバルナ自然保護区(1983年)
②ピリン国立公園(　同　)

世 界 文 化 遺 産

①ボヤナ教会

⑥リラの僧院

ブルガリア共和国の歴史

紀元前19000年ごろ
　インド・ヨーロッパ語族のトラキア人が居住、黄金製品が出土。うち2か所が世界遺産に登録されている。

681年　アジア系遊牧民族のブルガール人が西進し「第1次ブガリア帝国」を建国。首都はプリスカに。そのご、先に移住していたスラブ民族の方が多かったために、ブルガール人は混血・同化し、現在のブルガリア人の祖先となる。

1018年　ビザンツ帝国に滅ぼされる。

1187年　第2次ブルガリア帝国の建国。首都をタルノヴォ(現、ヴェリコ・タルノヴォ市)とする。

1396年　オスマントルコに征服される。最初の100年間は善政だったが以後、約400年間は圧政に苦しむ。

1878年　露土戦争でロシアがオスマントルコ軍に勝利しブルガリアが独立。同戦争時のロシア軍の1指揮官に薩摩出身の山澤清吾(後に日本陸軍の師団長)がいた。

1941年　日・独・伊の3国同盟に加わり第2次世界大戦に参戦し、連合軍からソフィアなどが空爆に合う。

1946年　国民投票で社会主義のブルガリア人民民主主義共和国となり、親ソ国として共産党一党独裁体制になる。

1989年　ベルリンの壁崩壊後の11月に、共産党改革派のクーデターにより35年続いたジフコフ政権が幕を閉じる。

1991年　非共産党政権が誕生、資本民主主義の国づくりへ。

2007年　1月にEUに加盟予定。

2. カザンラック市の概況

位　置　ブルガリア共和国のほぼ中央。首都・ソフィアから高速道路を車で走って約2時間半の高原都市。バルカン山脈とスレドナ・ゴラ山脈の間にあるバラの谷の中で最も大きな町。

人　口　約7万人。

歴　史　紀元前40世紀ころから、現カザンラック周辺の高原にトラキア人が居住し、黄金文化を育んできた。以後、スラブ人やブルガール人、トルコ人などが入り込んで、アジアとヨーロッパの民族が交じり合ってブルガリア人となり、住んでいる。

世界遺産　カザンラック市周辺には古代トラキア人の小高い墳墓（右写真）が点 在し、その一つの鮮やかな天井壁画を有する「トラキア人の墓」が 1979年に世界遺産に登録された。

ブルガリアの地にインド語族系のトラキア人が現れたのは紀元前20～19世紀と推察され、数多くの墳墓があり黄金の装飾品や食器などが発掘されている。

トラキア人の墳墓群

世界遺産・トラキア人の墓記念館

墓から出土した黄金の装飾品や食器の一部

月桂樹冠

鹿の顔杯

トラキア人の墓
内部・天井の壁画

産　業　バラの花びらを蒸留して取るローズオイルの生産地。生産量は世界の80%を占めている。

バラの花を摘む乙女とローズオイルからつくった香水や石鹸、ワインなど

昔のローズオイル蒸留釜とオイル瓶

ばら祭り　毎年6月初旬に盛大なばら祭りが開かれ、ばらの女王が選ばれる。当協会は、2005年度のばらの女王・プラメナ・イヴァノヴァさんと日本語弁論大会優勝者・エミリア・ゲオルギェヴァ・コレヴァさん（ヴェリコ・タルノヴォ大学3年生）を06年5月に15日間招待し、県内各地で交流した。

2006年度からは、ばらの谷に点在するばら栽培市・町・村のばらの女王の中から第1回・「ばらの谷の女王」が選ばれ、カザンラック市のメーン通をパレードした。

パレードするばらの女王とばらの妖精

ばら祭りのメイン会場になるカザンラック市の中央広場。広場の一角に同市一のホテル（右写真）がある

カザンラック市の「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」

Ⅰ．原爆展開催の「扉」を開く･･･副大統領や駐日大使、カザンラック市長などの来広を機に

1. マーリン副大統領が核兵器の廃絶に共感

マーリン副大統領と秋葉市長
（2005年5月14日）

2005年5月14日(土)、ブルガリアのマーリン副大統領一行が来広した際に秋葉広島市長を表敬訪問した。その時、同副大統領から、「ソ連共産圏の核兵器搭載ミサイル約150発の管理責任者の時に『発射準備』の指令が下り、発射ボタンの前で待機していたことがある。1発の核弾頭は、広島型の30～40倍の威力があり、ボタンを押せば第3次世界大戦が勃発し、世界の人類に甚大な被害が出る。頭に浮かんだのは多くのブルガリアの子どもたちの顔だった」と逡巡した経験を吐露。「幸いにボタンを押すことなく済んだが、核兵器は人類の敵だ。廃絶しなければいけない」と語った。さらに、同副大統領は行き先々で、平和都市・広島市に、ひろしま・ブルガリア協会が誕生することは大きなニュースだ」と当協会の設立と活動に大きな期待を寄せた。

その時、同副大統領一行の案内役をしていた、ひろしま・ブルガリア協会設立準備委員会の今村功・事務局長(現、会長)は、協会設立の責任の重さをひしひしと感じるとともに、「いつの日かブルガリアで原爆展を開催できないものか･･･」と強く思った。

2. センドフ駐日大使が協会設立総会でヒロシマとの連帯を訴える

当協会設立総会で挨拶するセンドフ大使
（2005年7月8日）

約2か月後の7月8日(金)に、ひろしま・ブルガリア協会を広島市中区の県民文化センターで開催たが、その際、駐日ブルガリア共和国大使館のセンドフ特命全権大使が駆けつけ、歓迎の意を述べた、以前に原爆資料館(広島平和祈念資料館)を見学したことがある同大使は、人類史上初めての核兵器の被害を受けた広島が100万都市に発展したことを注目するとともに、核兵器廃絶と世界の恒久平和の構築へのヒロシマの役割の重要さを指摘し、「広島とブルガリアの友好交流を促進して世界平和に貢献しよう」と期待を寄せた。

センドフ大使と秋葉市長

同日、設立総会の前にセンドフ大使を案内し、広島修道大学での「設立総会記念講演会」(同大学と当協会の共催)で講演と児玉学長との懇談、広島市立大学に藤本学長の表敬訪問、(財)ひろしま国際センターで紙元専務理事と懇談、秋葉忠利広島市長の表敬訪問などを行った。

中でも秋葉市長との意見交換では、同市長から被曝60周年・平和都市会議と平和記念式典にブルガリア・カザンラック市のダミャノフ市長を招待し、来広されることになったと報告、同大使にも是非、同平和式典へと招待し、今後の友好交流を促進を約束した。

3. ダミャノフ市長が被爆60周年の8月6日に原爆展開催を約束

ダミャノフ市長の歓迎交流会

被爆60周年・2005年の 8月5日(金)、6日(土)に同市のダミャノフ市長は、平和市長会議、平和記念式典への参加のために初来広した。

その際、当協会は5日の夕に「カザンラック市長を囲む夕べ」と題してダミャノフ市長の歓迎交流会やパーティを行った。パーティの後、樋口英子会計理事・事務局次長の提案で6日夜に、原爆ドームの前を流れる太田川で行われる被曝犠牲者の冥福を祈る「灯ろう流し」の灯ろうに同市長と通訳のマリアさんに、平和を願う「平和は私たちの手の中に有るので守らなければならない」との揮ごうをしてもらう。

ダミャノフ市長の歓迎会

8月6日、ダミャノフ市長は広島市の平和記念公園で行われた「被曝60周年・広島平和記念式典」に参列された。
同式典が炎天下で行われたことから同市長は軽い日射病気味になったため、昼から市内の涼しい場所でしばらく休憩を取ってもらう。
午後、元気になられたところで懇談し、その中で浅野洋二相談役と今村功現・会長が、カザンラック市での原爆展の開催を提案した。これに対し同市長は「グットアイデアだ。カザンラック市で必ず開催する。開催できるように広島市や平和記念資料館などの関係機関との橋渡しをして欲しい」と言い残され、帰国の途につかれた。ここで、やっと原爆展開催の「扉」を開くことができたのである。

4. カザンラック市への原爆展資材の目録を預かる

前田資料館長から被爆証言のDVDとともに

第1次・訪問団の団長代行を務めた今村功現会長は、2006年5月26日（金）、広島平和記念資料館（原爆資料館）から連絡を受け、同資料館を訪れ、前田耕一郎館長からカザンラック市に贈る原爆資材の目録と被曝証言集DVDなどを預かった。

同館長は、原爆展で展示するパネルを説明した後、「原爆展の開催と成功を願っています」と激励と同展の反響に期待を寄せた。

今村現会長は、急だったので海生直人会長（当時）や佐々木典明代表理事（同）、訪問団員らが来館できなかったことを謝辞した後、原爆展が予定通りに8月に開催されることをダミャノフ市長から確認し、現地で核兵器廃絶と恒久平和を希求するヒロシマの心を訴えてきたい、と決意を述べた。

前田館長から原爆展の目録などを預かる
（2006年5月26日）

Ⅱ. 原爆展開催の「道」を創る・・・第1次・「ブルガリア訪問団」がカザンラック市で確認

1. 第1次・ブルガリア訪問団の日程

２００６年

5月30日（火） 14:30 広島空港発・全日空機で羽田に出発。15:30羽田着 専用バスで成田ビューホテルへ（1泊）。

31日（水） 10:30 成田発・オーストリア航空機でウィーンに出発。16:00 ウィーン着。20:05 ウィーン発・オーストリ ア航空機でソフィアに出発。22:45 ソフィア着 ソフィア・プリンスホテルへ（ソフィア1泊）。

6月 1日（木） 10:00 在ブルガリア日本大使館の福井宏太郎全権大使を表敬訪問。カザンラック市での原爆展開催への協力を要請・確認。

11:00 JICAブルガリア事務所に香川敬三所長を表敬訪問。同原爆展への協力を要請・確認・

12:30 2005年8月6日前後に核被害と医学研修のために来広したソフィア大学医学部5年生のジェコ・ディミトロフ・ナイチョフ氏に会い、同原爆展開催を案内するとともに、同医学部の視察を要請。

14:30 ソフィア第18総合学校・「ウィリアム・グラッドストン」を訪問。同原爆展の案内と原爆被害を訴える。

6月 2日（金） 13:30 ヴェリコ・タルノヴォ市のヴェリコ・タルノヴォ大学・「聖キリルとメトディ」を訪問。同原爆展の案内と原爆被害を訴えるとともに、広島大学からの日本語教師派遣で条件を確認。（ヴェリコ・タルノヴォで学生宅に1泊）

6月 3日（土） 17:00 カザンラック市役所にステファン・ダミャノフ市長を表敬訪問。原爆展の開催日程などを確認。（同市近郊のヤコダ1泊）

6月 4日（日） 世界遺産のトラキア人の墓やブルガリア第2の都市・プロヴディフなどを視察。（プロヴディフ1泊）

6月 5日（月） 世界遺産・リラの僧院を視察。

6月 6日（火） 11:00 大統領府にアルゲン・マーリン副大統領を表敬訪問。同副大統領に急用ができスヴェトラ・トシコヴァ官房長に会い、原爆展開催と協力などを要請・確認。（ソフィア2泊）

13:30 ソフィア大学医学部を視察。

15:00 国立・感染症病院を視察。

6月 7日（水） 8:25 ソフィア発・オーストリア航空機でウィーンへ。9:05ウィーン着。（ウィーン泊）

6月 8日（木） 14:50 ウィーン発・オーストら航空機で成田へ。

6月 9日（金） 8:40 成田着。リムジンバスで羽田へ。12:30羽田発・全日空機で広島へ。13:50広島空港着。

2. 第1次・ブルガリア訪問団のメンバー

10人（広島市民8人、東広島市民、山梨市民が各1人）

1. 団　　長　寺田 満和　理 事 医師
2. 団長代行　今村　功　常任理事・事務局長 協会専属
3. 副 団 長　福本 尚子　理　事　カルチャーサロン主宰
4. 事 務 長　本多みとり　理　事 主　婦
5. 団　　員　山尾 ひとみ　理　事 会社代表取締役
6. 　同　　木村 一江　理　事 会社役員
7. 　同　　佐藤 佳代子 幹 事 主　婦
8. 　同　　坂井 紗織　幹　事 広告デザイナー
9. 　同　　今村 悦子　会　員 会社員
10. 　同　　水上 由里　会　員 ペンション経営者

羽田空港で浅野相談員と合流し、成田空港まで一緒に

3. 在ブルガリア日本国大使館の表敬訪問

福井特命全権大使に原爆展開催の協力を要請

6月1日（木）、ブルガリの首都・ソフィアでは、まず原爆展の開催まで何かとご支援をいただいた在ブルガリア日本国大使館に福井宏一郎特命全権大使を表敬訪問。これまで広島からメールで連絡を取り合っていた広報文化担当の山岸あおい書記官が出迎えてくれ会見室に案内された。

会見室では、今村団長代行、福本尚子副団長、本多みとり事務長などが、団を代表して、秋場広島市長からの原爆ドームのタペストリー、世界遺産・宮島の宮島彫り、原爆展写真ポスターのパンフレット、広島案内パンフレットなどを福井大使に手渡した。

福井特命全権大使

福井大使に手渡された原爆ドームのタペストリーや原爆展のパンフ

今村団長代行と福井大使とは、2005年5月14、15日にアルゲン・マーリン副大統領が広島入りした際に会って以来で、再会を懐かしんだ。そして、8月にカザンラック市で開く予定の原爆展のパンフレットを手渡し、内容を説明しながら、同展の資材搬入に協力いただいたことと、同展の「後援」をしていただいたことの礼を述べた。

これに対して山岸書記官から、「原爆展の資材はすでにカザンラックに搬送した」との報告を受けた福井大使は、原爆展の開催に出来るだけ協力することと、成功を祈ると激励してくれた。

原爆展開催の「道」の第1歩となった。

お世話になった山岸書記官（右から4人目）と

広島の世界遺産・原爆ドームのタペストリーと宮島の宮島彫りを手に記念撮影

4. JICAブルガリア事務所の表敬訪問

香川所長らに原爆展開催の意義を訴える

2005年12月末に、広島に里帰りされたというJICAブルガリア事務所の香川敬三所長から、思いがけず連絡があり、今村常任理事・事務局長と樋口会計理事・事務局次長が会い、色々なアドバイスをしてもらった。それ以来、原爆展の開催と第1次・訪問団の件で何かとお世話になった。そこで、6月1日（木）11時過ぎ、同事務所長を表敬訪問した。

2005年12月に広島で会って以来、世話になった香川所長と再会

香川所長は、前夜23:00時にソフィア空港に到着した時にも出迎えていただき心強く思い、訪問団員一同はその誠意に心を打たれた。

原爆ドームのペスタロッチを手に掲げる香川所長と長井氏と訪問団員

JICAブルガリア事務所でも第1次・訪問団は、秋葉広島市長から預かった原爆ドームのタペストリーを贈呈し、8月開催予定のカザンラック市での原爆展のパンフなどを渡して同展の意義を伝えるとともに、同展の開催と成功のために、さらなる協力と支援を要請した。

これに対して、香川所長は自らの郷里が広島であることから原爆展について重要な役割があると認識していて、全面的な協力をする旨を約束してくれた。

その後、同所長と長井健氏から、JICAブルガリア事務所の事業の説明があり、団員一同は日本の国際貢献の現状を知ることができた。

5. ソフィア第18総合学校の訪問

校長と中学2、3年生に核兵器の脅威を説明

訪問団一行は、6月1日(木)14:30に、日本語コースを持っているソフィア第18総合学校を訪問し、ヴェリチェカ・ソトイチュヴァ校長に、原爆ドームのタペストリーと宮島彫りをはじめ、原爆展のパンフレット、広島県・市の案内冊子などを贈呈し、カザンラック市での原爆展の案内と機会があれば同展への参加を呼び掛けた。

原爆ドームのペスタロッチを受け取り開くソトチェヴァ校長

小学校から高校までの一貫教育校の同校では、数年前から中学校から日本語コースを設けていたが、昨年から小学校から日本語コースを始めたという。

この日は、中学校2、3年生約30人と交流した。生徒はヒロシマの原爆のことは知っていたが、約14万人の死者が出たことや、生存している被爆者が現在も苦しんでいる状況など詳しいことは知っていなかった。

中学2、3年生約30人の生徒からは原爆のこと,広島の発展のこと、若い人たちの過ごし方などについて質問が集中した

交流が終わった後に同校の玄関で中学2、3年生約30人らと団員らが記念の写真に

6. 第2次帝国の都にあるヴェリコ・タルノヴォ大学を訪問

イヴァン・ハラランペフ学長に原爆展の紹介と日本語教師派遣で意見交換

ブルガリアの第2次帝国の都だったヴェリコ・タルノヴォ市にある国立ヴェリコ・タルノヴォ大学・聖キリルとメトディを表敬訪問し、カザンラック市での原爆展を紹介するとともに、原爆ドームのタペストリーと宮島彫りをイヴァン・ハラランペフ学長に贈呈した。さらに、広島大学からの日本語教師派遣について、具体的な条件を再確認した。

ヴェリコ・タルノヴォ大学を表敬訪問し原爆ドームのタペストリーと宮島彫りをイヴァン学長に

イヴァン学長は、当協会の活動に関心を寄せながら、原爆展の成功と広島大学からの日本語教師の派遣と今後の交流などに期待を寄せた。

日本語コース大学3年生の教室を参観

次いで、2004年から3年連続で日本語弁論大会の優勝者を出した同大学の英語日本語学科の授業を見学した。教室の窓側前から2列目に、5月に当協会が広島に招待して、原爆資料館の見学や慰霊碑への献花を行った2006年度・日本語弁論大会優勝者のエミリアさん（当時3年生）が、熱心に勉強していた。

同大学では、青年海外協力隊の日本語教師2人とブルガリア人日本語教師2人の計4人が日本語を教えていた。生徒は、1年から4年生まで約30人とのことだった。高台にある同大学のキャンパスでは、学生の姿があちこちで見られ、この大学・聖キリルとメトディでも近いうちに原爆展を開きたい、と思った。

第1次・「訪問団」の団員は、同大学の日本語学科の教師・学生14人と同大学の喫茶店で交流会を行った。各メンバーは、学生生活や日本への関心などを聞くとともに、広島の被爆について説明し、カザンラック市での原爆展への参加を呼び掛けた。

和やかに懇談した後にメンバー全員で記念の写真に

7. カザンラック市の初訪問

ダミャノフ市長が巡回展の開催も確約

寺田理事を団長とした第1次・「ブルガリア訪問団」（10人）は2006年6月3日（土）、カザンラック市役所にダミャノフ市長を表敬訪問した。同市長とは約1年前の2005年8月5日に広島市を訪れた際に歓迎交流会で会ってからの再会っだった。席上、今村団長代行が、①8月の原爆展②8月以外の月に周辺地域での巡回原爆展③毎年8月の原爆展・・・などの開催を要望した。

原爆ドームのタペストリーを贈呈

これに対して、同市長は、全てを実施するように努力すると約束し、8月に1か月間に渡りカザンラック・アートギャラリーで「ヒロ